

過去・現在・未来を語り合う「知」のひろば

朝日新聞 関西スクエア

Asahi Kansai Square

No.
177
2015.12



市民参加オペラ「天空の町」大阪へ

NPO法人 東京オペラ協会 & オペラプラザ関西



「歌って演じる喜びを広めたい」

銅の製鍊所が出す煙で荒廃した山を緑によみがえらせた男のオペラ「天空の町—別子銅山と伊庭貞剛」が来年5月8日に大阪で公演されることが決まり、主催のNPO法人東京オペラ協会などによる実行委員会が発足した。銅山の地元、愛媛県新居浜市で12年に初演して以来、毎回各地で市民から出演協力者を募って重ねた公演は、海外も含めすでに20回。そのパワーは、どこから生まれてくるのだろう。(黒沢 雅善)

みんな友だちになるのが一番

11月15日夕、大阪市中央区のプッチーニホールという小さな音楽ホールに、17人の男女が集った。東京オペラ協会の代表・芸術監督で「天空の町」を作詞・作曲した

石多エドワードさん(68)をはじめ、大阪公演の事務局を務めるオペラプラザ関西の人たちや、初演のときから支援してきた新居浜市の人たち、活動に共鳴する音楽家たちなどだ。

実行委員会の発会式が始まった。和やかな雰囲気の中

「仕事場 拝見」市民参加オペラ、大阪公演へ	1 ~ 5
「視点/私点」シンガポール版・書を捨てよほか	6 ~ 7
神秘と謎の国・エジプトを再訪	8 ~ 10
「花を訪ねて」カンラン	10

主な内容

「小さな出会い」味わい深く創作四字熟語	11
「とびっく・ナウ」味わいクールに徒然草ほか	12 ~ 13
「朝日カルチャーセンター公開講座」	13
「知の点景」国立民族学博物館の「音楽」展示室	14

に静かな決意を込めて、出席者らが大阪公演にかける思いを語った。

「別子の山は今、緑が戻ってすばらしい自然に包まれています。その陰に一人の男の尽力があったことを、もっともっと多くの人々に知ってほしい」

「音楽経験がない人、障害を持つ人でもオペラに参加できるというコンセプトに感動して、協力させてもらっています」

そして、石多さんがあいさつに立った。

「いろんな人が音楽で結ばれて一堂に会し、ユニバーサルデザイン（文化・言語・国籍・老若男女といった差異、障害、能力の違いを問わずに利用できる施設・製品・情報の設計）でオペラができたら、どんなにすばらしいだろうと思って、ここまで続けてきました」

「私の父はフィリピン生まれの日本人、母はフィリピン人でした。日本の戦争に協力したと言われてフィリピンで殺されかけたところを、近所の人たちが助けてくれました。おかげで戦後に大阪で私が生まれ、育つことができました。戦争は絶対にしてはいけません。口先でいくら世界平和なんて言ったって、うそっぽい。力を持った者が勝ちという世界も嫌ですよね」

「みんなが友だちになるのが一番だと思います。音楽を通じてなら、国や肌の色が違ってもきっとわかり合えます。「天空の町」はそんな思いを込めて、脚本も詞も曲も私がつくりました。みなさんに助けていただいて大阪でも、舞台で歌う喜びを広め、人と人をつなぐ大きな輪をつくりたい」

この日は出席しなかったが、発起人には元NHKニュースキャスターの磯村尚徳さん、作家の加賀乙彦さん、前滋賀県知事の嘉田由紀子さんらが名を連ねた。

てっきりプロだと思ったが…

次に、石多さんと4人の歌手が「天空の町」から数曲を、実際の舞台の所作を交えて披露した=表紙の写真、左から2人目が石多さん。ピアノを伴奏し、ときに立ち上がって一緒に加わる石多さんに4人が応え、ホール全体が豊郁とした歌声に包み込まれた。

「うーん、さすがプロですね。圧倒されました」

吐息をつく私に、隣席の人がそっと教えてくれた。

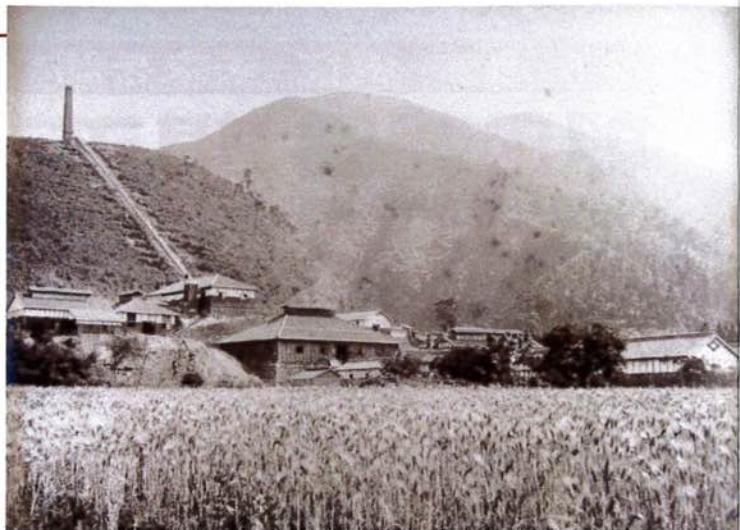
「違いますよ。みんなアマチュアです。プロは一人いません」

「え、うっそー！」

驚いて思わず、タメ口が出てしまった。確かに出席者の中にはプロもいるが、4人はほかに仕事を持っていて、石田さんの活動に賛同した人たちだという。

その中の一人、オペラプラザ関西の大島圭子さん=同中央の人=が、オペラとの出会いを話してくれた。

「改めて音楽を学んだ経験はありません。3年前の初



頂上に煙突がそびえる「えんとつ山」を背にした、かつての山根製錬所=別子銅山記念館提供



演のとき、夫の転勤で新居浜に住んでいて出演者募集を知り、子どもと一緒に軽い気持ちで参加したのが最初です。練習は厳しく、ついてゆくのが大変でしたが、舞台で歌えた楽しさは忘れられません。一度だけのつもりだったのが、大阪に戻ってからも、『次も頼むよ』と声をかけていただいて抜けられなくなってしまって（笑）。おかげで、多くの人とつながりができ、世界が広がりました。今度は地元の大阪で、大きい公演なので、しっかりお手伝いしなければと気を引き締めています

「天空の町」は、愛媛県内をはじめ、主人公・伊庭貞剛の出身地の滋賀や東京、福岡、広島、長崎などで公演を重ねた。14年8月にはポルトガルの里斯ボンでも上演した。16年には大阪公演の後、7月末にドイツで公演することが決まった。

大島さんと同じようにして育った人たちが、各地に友

「天空の町」あらすじ

■プロローグ 優しい大自然

別子山に秘めやかに咲く花と深い緑の木々が優しい歌を歌っている。そこに旅人がやって来て、活気づいていた往時の別子山をよみがえらせる。

■第一幕 青春 弘化4～明治27年（1847～1894年）

別子山で働く女たちが、日本のいい男ってどんな人？と問い合わせながら物語は進む。山の昔からの生活の様子、切り上がり長兵衛による鏡山の発見、住友家初代総理事の広瀬宰平による繁栄が次々と展開する。

伊庭貞剛は22歳で、尊敬する勤皇の志士の要請で動乱の京都へと旅立つ。明治維新以後は官吏となり、結婚するが、妻は北海道での勤めで無理がたり、早世



「天空の町」の初演。多くの市民が参加して舞台を支えた＝2012年5月、新居浜市市民文化センター。星川陽一さん撮影、東京オペラ協会提供

好団体のオペラプラザをつくる支えている。大阪公演にも大勢が応援に駆けつける予定だ。

伊庭貞剛＝禪にも通じた生涯

まだ「公害」という言葉になじみがなかった明治時代半ば、新居浜近郊では、別子銅山の山根製錬所などの煙突が吐き出す煙に含まれる二酸化硫黄（亜硫酸ガス）によって、山林や田畠の作物が枯れる被害が頻発した。荒れ果てた田園の姿に心を痛め、「天地の大道に背く」と嘆いて対策に献身したのが、このオペラの主人公で、銅山を経営した住友家の第二代総理事を務めた伊庭貞剛（1847～1926年）だった。

銅山の支配人となって現地へ単身赴任した。自分の足で野山や町村を歩き、採鉱夫や製錬夫の声にひざ詰めで耳を傾けた。四国本島の製錬所を閉鎖し、瀬戸内海の無

してしまう。後添えをもらい、仕事へと邁進する。しかし、正義感あふれる彼は、藩閥政治の官界は住むべき世界でないと考え、きっぱりとやめてしまう。故郷に帰り、家族との束の間の団らんを楽しむ。住友の発展のため優秀な人材を探していた広瀬は、伊庭を本店支配人に説う。伊庭は、煙害で大変な状況にある別子銅山に単身向かうことを決意する。

■第二幕 晩晴 明治27～大正15年（1894～1926年）

伊庭は、自然が徹底的に破壊された別子山の嘆きを深く抱きとめ、過酷な労働にいら立つ鉱夫たちとの折衝にも誠実に粘り強く向き合い、解決に導く。四阪島に製錬所を移転する決定を下し、山を緑に戻すため、年間100万本の植林などを次々と実行する。

労使紛争、煙害、緑化など全てを解決に導けたことを、帰阪して誇らしげに報告する伊庭に、信頼する義山和尚の「世の中まじめに観てな」の一聲。やがて、自分の成功は、難しい事務作業に一生を捧げてくれている部下、多くの鉱夫やその家族、そして大自然からの恩恵があって初めてできたことなのだと気づく。

謙虚に感謝する伊庭に「晩晴」を見出す。日本人の本来の心、清貧、陰徳、謙虚、素朴、無為自然、自然賛美などにこそ世界へのメッセージがあると、死を前にした伊庭が静かに語る。

■エピローグ 大自然の歌

別子山がもう一度静かに大きく浮かび上がる。自然こそが神だ、と旅人は語り、ほほえみながら去っていく。最後に別子山に生きるすべての命がもう一度元気によみがえり、大自然に抱かれることの幸せが、大合唱で歌いあげられて幕となる。

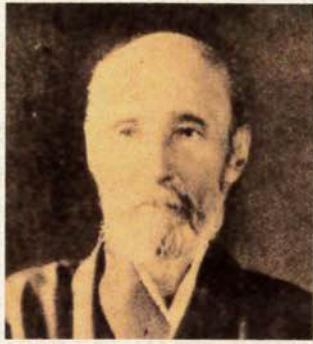
（東京オペラ協会ホームページなどから要約）

人島、四阪島（現今治市）に移転させた。裸になった山々に毎年100万本以上、総計約1億本の木を植えた。

その事績や経歴は、上の歌劇のあらすじと次ページの略年譜を参照していただきたい。財閥というバックがついて、企業としてのしたたかな計算も働かせたろうとはいえ、そして、当時の科学技術では限界があったとはいえる、大胆で画期的な対応だったと言えるだろう。

大企業のトップなのに、地位や名声に執着しなかったようだ。煙害対策に区切りをつけて別子から大阪に戻って5年後、総理事になって4年後の58歳のときに所感録を著し、「事業の進歩発展にもっとも害するものは、青年の過失ではなくして、老人の跋扈である。（中略）その役割をいふと、老人は注意役、青年は実行役」と説いて引退。80歳で没するまで、大津市・石山の別荘、活機園に隠棲した。禪にも通じた徳の人だったといふ。

伊庭貞剛・略年譜



1847 近江国野洲郡八夫村=現滋賀県近江八幡市に生まれる
1869 刑法官少監察に任官。彈正台京都支部へ出仕
1872 司法省司法検事

1873 まつと結婚。函館に転任
1875 まつ病没。梅と再婚
1877 大阪上等裁判所判事
1879 広瀬宰平の勧めで住友家に入る。別子銅山を視察
1880 住友大阪本店支配人
1890 第1回衆院選で当選（翌年住友家家長死去で辞任）
1894 別子銅山支配人となり改革のために単身赴任。植林を開始
1895 山根製錬所閉鎖
1897 四阪島製錬所建設に着手
1898 別子銅山山林課（住友林業の前身）を再設置

1899 住友本店に帰任。大水害で鉱山全施設に壊滅的打撃。採鉱課を除く全施設を新居浜に移転
1900 住友家第二代総理事に就任
1901 住友鋳鋼場（住友金属工業の前身）を開設
1904 所感録「老成と少壯」を発表。退職して石山別荘に隠棲
1905 四阪島製錬所が本格操業。東平・山根收銅所（鉱毒水の中和施設）設置
1923 住友家関係一切の任を辞す
1926 10月、80歳で死去。近江八幡西宿の伊庭家墓所に埋葬

そんな伊庭貞剛の生涯をたどる「天空の町」は、二幕とプロローグ、エピローグで構成される。大自然と一体となってありのままに生きることと、現代の日本人が忘れかけた清貧、謙虚、素朴……とはどういうことかといふ問い合わせが縦糸となって、作品全編を貫く。

市民の頼みがきっかけで創作

関西スクエア会員の文化ジャーナリスト、白鳥正夫さんの著書『ベトナム絹絵を蘇らせた日本人』（三五館、2012年）のエピローグに、このオペラがつくられた経緯が紹介されている。

それによると、石多さんは新居浜の一人の女性市民から「100年以上も前に別子の山を緑に復活させた伊庭貞剛を主人公にした歌劇を創作して、世界各地に届けてほしい」と頼まれた。感銘して構想をあたため、別子を何度も訪れて地元の人々と交流し、5年をかけて作品を上げた。ところが、依頼した人が完成を待たずに亡くなる。石多さんは死を悼み、「何としても新居浜で初演を成功させたい」と改めて決意した。

大阪公演では、下の表のファクス、メール、ホームページなどを通じて、合唱の40人とソリスト10人の出演者を市民から募集している。

合唱は、音楽経験、障害の有無、年齢に関係なく、だれでも応募できる。石多さんらが指導する週1回、計20

回ほどの練習にできるだけ参加することが条件で、楽譜・DVD・台本代とレッスン料が必要。

ソリストは、声楽の経験がある人が主な対象で、オーディションがある。

ともに11月末で応募を締め切り、公演に向けた練習が12月から始まる。

× × ×

実行委発会式の後、石多さんに一つ質問した。

——経験も力量も大きく違うプロから初心者までを毎回とりまとめるのは、大変なご苦労ではないですか。

すぐに答えが返ってきた。

「とんでもない。それが一番楽しいんです。音楽を楽しんだことがあまりなくて、最初はか細い声しか出せなかった人が、練習を重ねるたびに上手になります。そして目つきや表情がいきいきと輝き出し、どんどん若返るんです。人間って、こんなにすごいことをできるんだと、こちらが逆に教えられます。そんなときですよね。ああ、音楽やっててよかった、幸せだなあ、と実感できるのは」



「天空の空—別子銅山と伊庭貞剛」大阪公演の予定

- ◇とき 2016年5月8日（日） 昼夜2回公演
- ◇ところ 大阪国際交流センター大ホール（大阪市天王寺区上本町8-2-6）
- ◇料金 指定席 5,000円 自由席 3,500円
- ◇問い合わせ先 オペラプラザ関西 Fax: 06-4866-0141 mail: kansai@tokyo-opera.gr.jp
- URL: <http://www.tokyo-opera.gr.jp/opk.html> 担当: 大島佳子 (☎ 090-9137-1976)

市民に出演協力を呼びかける大阪公演のチラシ

オペラの舞台を訪ねて

緑探し別子銅山



山根製錬所跡の煙突の前で「えんとつ山俱楽部」の人たちと、研修に訪れた新居浜市職員たちが記念撮影。最前列中央が直野菅男さん。周囲に木が茂り、豊かな緑に包まれている＝直野さん提供

新居浜文化協会元副会長の直野菅男さんに案内していただき、新居浜市にある別子銅山の今を訪ねた。直野さんは、生子山（通称「えんとつ山」。標高144m）頂上に残る山根製錬所跡の赤れんが煙突を現代に生かそうと呼びかける市民団体「えんとつ山俱楽部」の代表でもある。

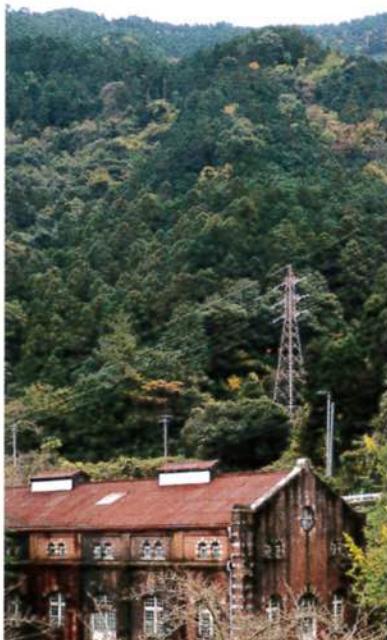
まず、えんとつ山ふもとの別子銅山記念館で山の沿革を学び、マイントピア別子本館に向かった。掘り出した鉱石を集めて選り分ける採鉱本部があったところだ。操業をやめた現在はリゾート施設に鉱山鉄道の駅が併設され、坑道観光の拠点になっている。銅山の世界遺産登録を目指す看板が立ち、赤れんが造りの水力発電所が残っていた。常緑樹がうっそうと茂る背後の山を直野さんが見上げ、「私が子どもの頃は一面はげ山でしたのに、よう育ってくれました」と感慨深げだった。

さらに、東洋のマチュピチ（インカ帝国の山上都市遺跡）と異名をとる山奥の東平地区へ。一步間違えば谷底へ落ちそうなつづら折りの道を小型バスに揺られて約30分。「最盛期には山で働く人と家族約5000人が暮らしていました」。ガイドさんの説明を聞きながら巡った。今は無人。かつてのにぎわいが信じられない。家や学校、索道（荷物用ロープウェイ）基地の礎石が、深い森と霧の中に静かにたたずんでいた。

翌日、晴れ渡った秋空の下、森の緑に紅葉が混じるえんとつ山に登った。俱楽部の人たちが開いた登山道は、入り口に自由に使える杖が置かれ、随所に標識や休憩用ベンチが設置されていた。「自然の回復力って、すごいです。茂った木を切るのが大変でした」と直野さん。

頂上は街を見渡す展望台として整備した。新居浜市も煙突を補修し、校外学習の子どもや市民のいこいの場になっている。市にとっても、職員が来歴を正しく知っておくべき大事な名所で、俱楽部の人たちが新人研修の案内・講師役になって協力しているそうだ。

市内に広瀬宰平の旧宅と記念館がある。市美術館を核として今夏完成了総合文化施設の名は「あかがねミュージアム」。市別子銅山文化遺産課元課長の坪井利一郎さんが関係書籍・資料・写真を集めた市立図書館の別子銅山コーナーも貴重なものだ。街の中を歩くとあちこちから、別子の山を愛し、ともに生きてきた人々の思いが伝わってきた。



採鉱本部の跡に残る水力発電所。木がほとんどなかつた背後の斜面にも、豊かな森がよみがえった



最盛期は5000人が住んだ東平地区。索道基地などの礎石が深い森の中に残る